

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 25 日現在

機関番号：10104

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20520273

研究課題名（和文） 近代ドイツ国家意識を背景とした国民祝典劇・記念碑の発展と衰退を探る

研究課題名（英文） The study about the Development and the Decline of the German national monument and festival play with modern national consciousness for the background.

研究代表者

鈴木将史（SUZUKI MASAFUMI）

小樽商科大学・言語センター・教授

研究者番号：20216443

研究成果の概要（和文）：

本研究は、18 世紀後半のゲーテ・シラー時代から、20 世紀初頭にかけてのドイツ国民祝典劇と、19 世紀半ばから世紀転換期までのドイツ国民記念の成立背景、及びその形態の変遷を分析・考察した。研究成果は、ゲーテ・シラーの祝典劇がまさに宮廷祝典劇から国民祝典劇への境界線に位置すること、以降の祝典劇は様式化を強め、記念碑とも共通する固有のスタイルを確立したこと、19 世紀末には愛国精神を揶揄した「パロディ祝典劇」が当時の時代精神を如実に反映した産物であったこと、などが判明した点である。

研究成果の概要（英文）：

I made researches in this research project on the German festival play from the late 18th century through the early 20th century as well as national monument from the mid-19th century to the turn of the century. The following things became clear from the researches: Goethe/Schillers festival plays are located at turning points from the court festival play to national festival play. The following plays intensified stylization and established a peculiar style in common with the national monument. At the end of 19th century, "The parody festival play" that made fun of patriotism reflected Zeitgeist of those days faithfully.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学

キーワード：独文学、祝典劇、記念碑、19 世紀転換期文学、ドイツ愛国精神

1. 研究開始当初の背景  
 本研究代表者は長年ドイツ世紀転換期文学、とりわけゲルハルト・ハウプトマン作品研究に携わってきた。ハウプトマンは周知の如く、

19世紀末から20世紀前半にかけてドイツ文壇に君臨し続けた作家である。「国民的詩人」と称えられた彼に、国家的祝祭であった1913年のプレスラウ解放戦争百周年記念博覧会を彩る「祝典劇」執筆が依頼された事実も従って不思議ではない。ところがこの祝典劇を、彼は従来の宮廷・国民祝典劇を書いた作家達とはかけ離れた理念で執筆し、結果的に記念公演は宮廷側、戦争協会側の反発を買い、公演中途打ち切りという屈辱的な失敗に終わる。この文学スキャンダルについては当時から様々な議論を呼び起こしたが、代表者は「祝典劇」というジャンルの制約に縛られながらも他に例を見ないその創作理念こそ、ハウプトマン文学の本質を形成するものではないかと考え、従来の祝典劇という文学概念がハウプトマンにあってはどのようにデフォルメされていくのかを研究し始めた次第である。そのためには、ドイツ祝典劇・記念碑全体の流れを俯瞰する必要に迫られ、研究を開始したわけだが、前回研究(H17-19基盤研究C「近代ドイツにおける精神的及び物質的モニュメント(祝典劇・記念碑)の諸相を探る」)の期間内では、祝典劇・記念碑は想定していた以上の伝統とバリエーションを有していることが判明し、「宮廷祝典劇・記念碑」の誕生から「国民祝典劇・記念碑」への移行期(人文主義時代からロマン主義前期まで)までを検証・考察するに留まった。本研究はしたがって、いよいよ19世紀末から20世紀初頭にかけての国民祝典劇・記念碑分析・考察に本格的に取り組んだものである。

## 2. 研究の目的

本研究は、前回研究の成果を踏まえ、近代(19世紀初頭から20世紀初頭まで)におけるドイツの祝典劇及び記念碑の個別的成立背景とその意義、また両者の関連性(成立経緯・モチーフなど)を調査・比較・分析し、これらのモニュメントをドイツ精神史の流れの中に位置づけることを第一の目的とした。それにより、後のナチズムの核となった狂信的愛国心へとつながる19世紀転換期におけるドイツ固有の国民意識の実体を究明することが可能となった。また、前研究と合わせて、中世よりのドイツ祝典劇・記念碑の大まかな全体像を明らかにすることができた。

本研究は、宮廷祝典劇・記念碑研究の成果をもとに、「モニュメント」というジャンル内での近代ドイツ国民祝典劇・記念碑の意義を探る点に学術的な獨創性が認められる。更には、両モニュメントの終着点(ハウプトマン「ドイツ韻律による祝典劇」、「ビスマルク記念塔」)を見据え、このジャンルの成立・発展・隆盛・衰退(或いは退廃)の検証が第二の目的となった。

## 3. 研究の方法

本研究における祝典劇研究分野は、文献の収集・分析を中心として進められる研究であるため、研究計画の前提は、どれだけ文献を収集・処理できるかという点に置かれている。

本研究における主要設備は、当然書籍資料類である。とりわけ一次文献となる祝典劇原典は、そのほとんどが小冊子の形でドイツ本国に保存されており、わが国ではほとんど入手されていない。そのため、そのほぼすべてをドイツ本国の図書館か、古書店に求めなければならない。幸い、ドイツの各図書館はデータベースの構築も進んでいるため、祝典劇をもっとも所蔵している施設はベルリン州立図書館であり、次にマールバッハ・シラー記念館及びバイエルン州立図書館の資料が充実していることが判明している。確認されているだけでも800篇以上存在する祝典劇の内、時代による特徴を色濃く反映する代表的なものを少なくとも40篇以上、電子複写で入手する必要があった。(前回研究で既に30篇ほど入手済み)

祝典劇原典の入手にあたっては、作品の取捨選択の基準が問題になるが、著名作家、重要な記念祭に上演された作品、独特なモチーフ・手法を用いた作品、あるいは先述したザウアー／ヴェルト、及びシュブレンゲルの著作、また他の文学史研究書・ハンドブック等を参考にして、総合的に取捨選択を判断した。

## 4. 研究成果

20年度：

20年度の研究の重点は、「人文主義時代に誕生し、啓蒙主義時代に体裁を整えた祝典劇が、ゲーテ・シラーの宮廷国民祝典劇を経て近代国民祝典劇へと発展する経緯についての分析」であった。この重点を鑑み、20年度はドイツ宮廷祝典劇および国民祝典劇の系譜におけるゲーテ・シラーの祝典劇を分析・考察した。

国民祝典劇の先駆といえるクライストの『ヘルマンの戦い』と相前後して、ゲーテは祝典劇『パレオフロンとネオテルペ』(1800)を執筆している。シラーも1804年に祝典劇『芸術への敬意』を発表しているが、両作品共、宮廷の祝祭を契機に執筆依頼された典型的な宮廷祝典劇である。そのためこの両作品はゲーテ・シラーの作品群にあってさしたる注目を受けないまま現在に至っている。しかし今回の研究で『パレオフロンとネオテルペ』が

ゲーテにとり「古き良き時代」と結びついた特別な作品であること、また『芸術への敬意』はシラーの戯曲中最後の作品であり、同時にドイツ宮廷祝典劇の掉尾を飾る重要な祝典劇であることが明らかとなった。引き続き、ゲーテは祝典劇『エピメニデスの目覚め』を1814年に発表するが、この作品は「エピメニデス＝ドイツ国民」の目覚めを主題に取った作品であり、ナポレオン解放戦争勝利により高まったドイツ愛国精神を表現する純然たる国民祝典劇であり、この事実から明らかなように、まさにゲーテはドイツ文学において、宮廷祝典劇から国民祝典劇への過渡期に活躍し、両祝典劇を執筆した唯一人の作家であるということができよう。ゲーテ・シラーのドイツ文学における位置づけは、既に極めて多角的な立場から究明されているが、祝典劇の分野においても両者はそれぞれ特別な地位を占めていることが今回の研究で明らかになったのである。

また記念碑研究においても、ケルン大聖堂およびニーダーヴァルト記念碑についてその国民記念碑的側面を考察した。

21年度：

21年度の研究の重点は、「ゲーテ時代以降のドイツ祝典劇が、ロマン主義を経て本格的な国民祝典劇へと進化し繁栄を迎えるその経緯と実態の実証的分析」であった。この重点を鑑み、21年度はレヴェツォウ及びブレンターノの初期国民祝典劇、更にヴィルデンブルーフ、ハイゼ、ローデンベルクといった19世紀中盤から後半にかけての繁栄期の祝典劇を分析・考察した。

ゲーテの祝典劇「エピメニデスの目覚め」を直接範に取り、その続編を描いた作品がレヴェツォウの「エピメニデスの裁き」である。この作品はゲーテ作品を祝典劇的に更に先鋭化し、フランスに対する連合軍の勝利を高らかに謳いあげ、トリオンフィなど祝典効果の高い演出を施したことにより、ゲーテ以上に後の国民祝典劇的要素を先取りした劇となっている。そしてほぼ同時期に書かれたブレンターノの祝典劇「ライン川に、ライン川に！」は、国民祝典劇では以降重要な要素となるライン川を擬人化した点で、先進的な祝典劇となった。また、この作品のフィナーレに登場する「レンゼの玉座」横にゲルマニアが位置する構図は、劇以上に「ニーダーヴァルト記念碑」など記念碑に応用された「記念碑的構図」といえる。こうした勃興期を経て、ドイツ統一がなった1871年以降、いよいよ国民祝典劇は量産され、繁栄期を迎える。その中心的人物として礼賛される人物は、皇帝以外で

はゲーテならぬシラーであり、ヴィルデンブルーフ「ヴァイマル賛歌」にその典型的な例が見られる。また、この時期から祝典劇で「平和」も礼賛されるようになるが、それはかつて30年戦争後の厭戦観の只中でリストが描いた「平和を願うドイツ」に見られるような戦争を忌避する意味合いではない。ハイゼやローデンベルクの国民祝典劇で礼賛される平和とは、戦争での勝者に訪れる平和なのであり、勝利の輝かしい報酬として歓迎されるのである。敗者は舞台からただ去るのみであり、平和を称える仲間からは阻害されたままである。

22年度：

22年度は、ドイツ帝国建国以降の世紀転換期ドイツ国民祝典劇の詳細な実態と、その精神性の特徴の究明に努めた。まず取り上げたのはフリードリヒ・ホーフマンの「三戦士」(1872)である。ドイツ統一を記念したこの祝典劇は、家族の会話により劇が進行するという、従来には見られなかった写実性・ベリズモ性が認められ、親子三代の戦士がそれぞれの戦いとドイツの状況をふりかえるという、作品に今までの祝典劇にはなかった歴史性が付与されている。これは祝典劇が社会的に認知され、一般劇に接近すると共に、建国なったドイツ帝国の正統性を強調する目的が新たに生じたためと考えられる。また、ホーフマンとほぼ同時期に、解放戦争で活躍した軍人達を顕彰した祝典劇も多数創作され、その代表作ともいえるマルティン・ベームの「セダン、或いは25年後」(1895)とフェリックス・ダーンの「モルトケ」(1890)を取り上げ、そこに現れた「聖戦」としての解放戦争像をより詳細に分析した。また、20世紀を迎え国民祝典劇も円熟期に入ると、機会的な劇から壮大な歴史劇へと祝典劇も大型化・総合化していく。その典型的な例であるエーバーハルト・ケーニッヒの「シュタイン」に見られる総合的なドイツ精神礼賛の特徴を検証し、祝典劇分野における作品変遷を明確化した。この時期の祝典劇は「三戦士」同様、神聖ローマ帝国より続くドイツ帝国の正統性を前面に訴えた作品が多く、特にその典型として、同時期に活躍した女流作家ヨハンナ・バルツの「国母」ルイーゼを主人公とした一連の祝典劇を考察した。

記念碑研究も同時に進め、国民記念教会の典型例として「ケルン大聖堂」を考察した。ケルン大聖堂は工事再開を経て600年という気の遠くなるような工期の末に完成したが、「ラインの守り」という言葉に象徴されるドイツの国体意識の芽生えが大聖堂の完成に極

めて重要な役割を果たしたことが判明した。この国体意識は、祝典劇とも共通する「ゲルマニア礼賛」という意識にも結びつき、そこに「ニーダーヴァルト記念碑」建設の原点も認められる。

23年度：

最終年度となる23年度は、今までの研究成果を踏まえつつ、成熟し切った国民祝典劇・国民記念碑の形態を、第一次世界大戦前まで分析・考察した。成熟期を経たドイツ国民祝典劇は、19世紀転換期から20世紀にかけて、懐古的で反動的な内容や、風刺的内容を見せ始めるが、本年度はその実態の究明に最大の重点が置かれた。最終段階を迎えた祝典劇には、様々な形態が現れ、新たに即位した皇帝ヴィルヘルムⅡ世の意向も加わり、一部の祝典劇は作品の様式美を追求し、宮廷を礼賛する傾向が再び顕著になってくる。そうした作品の代表的なものが、フランツ・ビュッナーの『ドイツの聖ミヒヤエル』(1896)とヨーゼフ・ラウフ『城塞伯爵』(1897)である。いわば「先祖がえり」したともいえるこれらの祝典劇の根本的特長とその精神的背景を、本研究では第一次世界大戦を前にして急速に高まりつつあったドイツ愛国精神に見出した。同時に、20世紀に入り爛熟期を迎えた祝典劇に「パロディ祝典劇」が登場するのも興味深い。当時流行し始めたベルリン・キャバレー文学は、時の社会精神を揶揄することをその旨としたわけであるから、愛国精神の文学的発露であった祝典劇を風刺しない筈がなかった。従って、その代表的存在であった小劇場「シャル・オント・ラウフ」や「ベーゼ・ブーベン」が創り上げたパロディ祝典劇の数々には、愛国精神を冷ややかに傍観し笑い飛ばす強烈な風刺精神が認められ、世紀転換期文学の新たな典型的形態と見なし得る。一方、国民記念碑研究においては、「キューフホイザー記念碑」へと分析の対象を広げ、いよいよ現れてくるドイツ国民記念碑独特の「塊」的構造スタイルの本質的設計意図とその背景を分析したが、研究結果の公刊までにはまだ至らなかった。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

①鈴木将史、宮廷祝典劇の終焉と国民祝典劇の誕生—ゲーテ・シラーの祝典劇—、小樽商科大学人文研究、査読無、第116輯、2008、21-38、  
<http://barrel.ih.otaru-uc.ac.jp/handle/>

[10252/1116](http://barrel.ih.otaru-uc.ac.jp/handle/)

②鈴木将史、ゲーテ以降の祝典劇—レヴェツォウとブレンターノー—、小樽商科大学人文研究、査読無、第118輯、2009、129-142、  
<http://barrel.ih.otaru-uc.ac.jp/handle/10252/3716>

③鈴木将史、ドイツ国民祝典劇の繁栄、小樽商科大学人文研究、査読無、第119輯、2009、55-88、  
<http://barrel.ih.otaru-uc.ac.jp/handle/10252/4074>

④鈴木将史、ドイツ国民祝典劇の繁栄(その2)、小樽商科大学人文研究、査読無、第120輯、2010、67-96、  
<http://barrel.ih.otaru-uc.ac.jp/handle/10252/4415>

⑤鈴木将史、ドイツ近代国民記念碑について(その2)—「ケルン大聖堂」から「ニーダーヴァルト記念碑」まで—、小樽商科大学人文研究、査読無、第121輯、2010、97-112、  
<http://barrel.ih.otaru-uc.ac.jp/handle/10252/4576>

⑥鈴木将史、ドイツ近代国民祝典劇の変容—反動的宮廷祝典劇から祝典劇のパロディまで—、小樽商科大学人文研究、査読無、第122輯、2011、109-126  
<http://barrel.ih.otaru-uc.ac.jp/handle/10252/4720>

〔学会発表〕(計1件)

5) ①鈴木将史、「ドイツ近代国民記念碑について(2)」  
北海道ドイツ文学会第67回研究発表会、2008、12. 北海道大学

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木将史 (SUZUKI MASAFUMI)  
小樽商科大学言語センター教授  
研究者番号：20216443